

《中学生の部》  
佳作（警察庁交通局長賞）

宮城県仙台二華中学校  
2年 高石 孝樹

ほんの少しの意識で

「ドン」という音が横から鳴ったとき、僕の体は地面に倒れていた。一回、ほんの一回でも確認していたならぶつからなかったのかもしれない。そう考えていると胸が痛くなつた。

小学五年生の夏、その日は夏休み前最後の登校日だった。いつも通りの時間に起き、慣れた手つきで身支度を整えていた。いつもと違うところをあげるなら、四時間授業が終わった後に友達の家で一緒に遊ぶ約束をしていた。そして、これからしばらくの間、毎日のように会えなくなるクラスメイトと話す最後の一日だった。慣れた手つきで整えているように見えて、内心ワクワクしていた。

「今日はいつもより早く行こう。」

僕は急ぎ足で家を出た。僕の家は、通路から道に出るときに、両側に石垣があるため、見晴らしが悪く、注意してから行かなければ危なかった。だが、注意力よりも気持ちの高揚の方が高まり、右も左も確認せずに僕は飛び出した。そのときだった。自分の真横からした強い音がきこえたときには、その場に倒れていた。自転車とぶつかった。あまりの出来事に声が出なかった。どうして周りを確認しなかった。確認していたらこんなことは起きなかつた。そう考えていると全身の痛みよりも自分の不注意に胸が痛くなつた。起き上がつたときにはすでに運転者は去つていた。

学校が終わり家に着いた。そのときにはほとんど治つていたが、念のため友達との遊びを断り、家で安静にしていた。帰ってきてすぐ、母に今朝あつた出来事を伝えた。母は非常に驚き、少し悲しい顔をした。夏休みのしおりに書かれていた「夏休み中はケガなく、事故なく生活しよう」という言葉を思い出した。今後も残る大きなかがや命にかかることが起きていたかもしれないのだと思うと、自分の不注意で周りの人を心配させてしまつたと反省した。

その夜、家族全員が揃つたころに「この家の交通安全のルールを家族全員で話しあいたい。」と言つた。自分の身にあったこと、それから考えたことを真剣に伝えると全員がやる気になって協力してくれた。全員で意見を出し合い、僕の家での交通安全ルールとして、「ヨナトミカ」という標語を作つた。ヨは、よそ見をしない。ナは、何度も。トは、止ま

る。ミは、目で見る。カは、もう一度確認する。これは被害者側も加害者側もどちらも必要なことだ。当たり前のことだが、欠けてしまうと事故につながる恐れがある。ルールの重要性を深く感じた。

交通安全ルールは事故を防ぐうえで大切なことである。しかし、事故をなくすには一人だけが守るのでなく、全員が守らなければ成立しない。どちらかが守っていても、もう一方がないがしろになっていると事故が起きてしまう。あのときは注意が足りなく、事故につながってしまった。歩行者も運転者も注意をする。ほんの少しでもお互いが意識するだけで事故は減らせる。このほんの少しの意識が広がり、社会が安心安全に生活できることを心から願う。